

ナチ体制と大衆

その研究史的整理

豊 永 泰 子

ナチズム研究は一九六〇年代後半以降盛んとなった。その際まず、大衆は何故ナチ党を支持したのか、ヒトラーの権力掌握はいかなる状況下になくなったのかという観点から、ナチズムの生成、発展が問題とされ、ついで近年、研究者の関心はヒトラー支配下の第三帝国（一九三三―四五年）に移っている。その支配機構について、第三帝国時代に宣伝されたような、ヒトラーの指導する一枚岩的な独裁支配体制というイメージは崩されつつある。それでもなお、ヒトラーなしの第三帝国は考えられないとして、ヒトラーの役割を決定的に重視し、彼が何を意図していたかということから第三帝国の政治をみていこうとする立場と、第三帝国の支配体制を多頭制ととらえ、ヒトラーについては状況に左右され、決断を回避しがちな弱い独裁者とみる立場を両翼に、活発な論争がおこなわれている。^①

P・ヒュッテンベルガーは一九七六年に「ナチ多頭制」と題する論文を書き、国防軍、大工業、ナチ党という三つの支配集団による多頭制的支配を主張し、この論争の口火を切った。彼はその際、この多頭制的支配構造が各社会層、例えば労働者階級、中間層あるいは農民層といかにかかわっていたかを分析しようとしたが、各社会層に関する研究がなお十分であるため、それは問題提起に終ったのであった。^②

その後論争はナチ支配体制のみをめぐって展開されると同時に、第三帝国の社会については、P・ヒュッテンベルガーが問題にしたような方向ではなく、第三帝国において人々はいかに生活したのか、を体験論的に叙述する方向にむかっている。例えば一九八〇年と八一年の二年間の西ドイツの出版カタログを瞥見すると、『褐色の日々』（brauner Alltag）、『ハーケンクロイツ下の日々』（Alltag unter dem Hakenkreuz）、『子供の日々』（Kinderalltag）、『労働者の日常生活』（Arbeiteralltag）等々と、枚挙にいとまのないほど、そうしたテーマの著作が目につく。このような社会生活史ないし体験史という観点から、これまでの政治史あるいは全体史では捉えきれなかった民衆の生活に光があてられることは、歴史像を深く豊かなものにするために価値あることと思われる。しかしその際、我々は木をみて森をみないことのないように気をつけなければならない。つまり、第二次世界大戦にいたる国際関係の緊張の高まりよりも農産物価格の動きに関心を寄せる農民、あるいはナチ体制の確立に大きな意味をもった一九三四年六月のレーム事件も、自己の経験に照らして判断し、乱暴な突撃隊員が処罰されたことを喜ぶ民衆。こうした民衆の生活が歴史の流れのなかにどのように位置づけられるのかを問わず、民

衆とまったく同じ位置から第三帝国を見てしまうならば、第三帝国での生活も案外よかった、というような素朴な感想にとどまってしまう懸念があるからである。^③

それでは民衆ないし大衆はナチ体制のなかにどのように位置づけられるのであろうか。関連した幾つかの文献を取り上げ、この問題を整理したい。それは、第三帝国の社会的基盤を考察するための準備作業である。

二

先述したように、現在の西ドイツでのナチズム研究は支配体制の研究と個別研究へと両極化している。むしろ第三帝国を逃がれ、亡命地で書かれた全体主義論的著作の方が鋭い問題意識と広い視野からナチ体制を捉えている。もとよりE・レーデラー流の大衆社会論は否定されたが、S・ノイマンとF・ノイマンの研究は今日なお教えられるところの多い名著である。^④まず両者の見解を取り上げたい。

シグモンド・ノイマンは「デモクラシーの危機に根ざし、現代社会の諸種の矛盾に培われて、全体主義体制はひとを混乱と無秩序から救いうる無二の存在と自称し、出現してきた」という文で始まる『大衆国家と独裁―恒久の革命―』において、両大戦間のヨーロッパを対象に、独裁（ソヴェト・ロシア、イタリア、ドイツ）とデモクラシーの構造比較をおこなっている。すなわち独裁政治機構のピラミッドの頂点にある、指導者と彼をめぐる少数のエリート、中間をなす独裁政党の組織、そして大衆的基盤にいたるまで、完全に組織化され統制され

た国家の構造を、民主政との対比において分析している。彼によれば、二十世紀の独裁は大衆民主主義の出現と伝統的諸制度の崩壊のおそれとを歴史的前提に、新旧二つの社会秩序の間隙をうめる「制度の代用」として出現した。つまりそれは、フランス革命以前の絶対制とは根本的に異なり、デモクラシーの経験を経た国々に出現する。したがってデモクラシーを忘れない民衆を支配するために、擬似民主的な道具立を必要とする。「合法的」な権力掌握、選挙制に対する外見的尊重、人気維持への腐心、大がかりなプロパガンダ機構あるいは世論の正確な探知等は、独裁の存立の前提条件である。

S・ノイマンは産業革命以降の社会を都市と農村に分け、両者の対立・緊張関係が国内政治を動かす主題の一つとなっていることを指摘したうえ、社会層を三つに分けている。第一は、伝統的な秩序の解体していない村落共同体の中に生活する農民である（一〇三頁）。都市では大衆社会の出現によって、かつて人々を一定の価値と確固とした慣習の世界に安住させた家族や近隣との古い社会的紐帯が破壊され、人々は孤立化せしめられ、農村の人々に較べてはるかに孤独であった（一〇六頁）。しかしプロレタリア大衆は団結と自治とをそなえた新たな組織、労働組合に組織化された。労働組合は、ただ労働者の生活水準と産業における彼の地位を向上せしめたのみならず、より重要なことは、労働者に再び団体意識を与え、孤独から来る性格の解体の危機から彼を救ったことである。労働組合に包摂されたプロレタリアが第二のグループであり、S・ノイマンはこれを合理的大衆と名付けている（一〇七頁）。それに対し、合理的社会主義の社会観に包摂され

ず、しかも現代社会の危機を如実に反映した無形の大衆、すなわち安定を欠いた「新中間層」、よるべき失業者、脱落者や帰還軍人の戦闘分子などが第三のグループである。

S・ノイマンによれば、ナチズムは新しい安定と秩序を欲求する無形の大衆にはナチ共同体の実現を訴え、旧来の社会秩序のなかで生活する農民には実利的な約束をし、両者を基盤として抬頭した。S・ノイマンはその際とくに社会的脱落者の戦闘分子の役割を重視する。彼らは無窮の革命を求め、独裁の推進力となり、政治意識のない失業者に衝撃をあたえ、絶望した中産階級に革命的熱血を吹込んだのである（一一二頁）。独裁国家は大衆化をさらに押しすすめ、社会の無数の集団結社をおしなべて灰色の大衆に融合し、その大衆を全体主義的政党を通し、統制・教化しようとする。

第三帝国下での民衆の位置づけはなお不十分であるが、ナチズムがデモクラシーを経験した後に出てくる独裁であり、したがって民主主義に対立しつつも民主主義的ポーズをよそおざるを得ないという指摘は、二十世紀の種々の独裁を比較する上で重要である。また大衆社会化現象を言いつつも農村については、伝統的な村落共同体的紐帯の存在を指摘し、第三帝国から恩賞を受取ることに成功した唯一の階級が農民であり、ナチ体制が農民の不満を抑えるべく細心の注意を払ったという叙述は示唆に富む。

F・ノイマンの著『ビヒモス』に移ろう。ビヒモスとはリヴァイアサンとともに旧約聖書に登場する混沌の怪物であり、世界の終末直前にあらわれ、陸で恐怖の支配をおこなう。F・ノイマンによれば、ナ

チ体制はまさにビヒモスであった。彼はナチ体制を支配階級と被支配階級に分ける。支配階級は本省上級官僚、党の指導グループ、国防軍指導者、産業指導者層（副次的地位に落ちた農業指導者層もふくむ）からなる。これらはおよそ同質なものとは言えず、集団があるのと同じだけ多くの利害に分かれ対立しているが、利潤、権力そしてなによりも被抑圧大衆に対する恐怖心ゆえに一つにまとまっている。こうした支配階級が五つの組織原理を駆使して大衆を支配する。五つの組織

原理とは（一）一元的全体的権力主義的組織（二）個人のアトム化と抽象的な「民族共同体」への編み込み（三）階層分化とエリート形成（四）文化の宣伝への転形とスローガンの瞬時性（五）暴力。

ここで我々の関心をひくのは第三の原理である。すなわち支配階級対アトム化された大衆一般ではなく、大衆が重層的に組織化されているという指摘である。「この大衆は、普通の官僚制機構では統制されない。それゆえ国民社会主義は、優遇とより大きな物質的利益と、より高い社会的地位および政治的特権を享受するエリートは大衆の中から選び出すことに努める。その返礼として、エリートは無定形の大衆の中で政体の先鋒をつとめる。必要な場合には、一集団と他の集団とを対峙させて都合のよい条件を作り出すことができる。人種上のドイツ人は、彼らの周辺で生活している他の諸民族に対比すれば、エリートである。人種上のドイツ人集団の内部では、国民社会主義党がエリートである。党内部では軍事組織（SAおよびSS）がさらにその上のエリートを構成する。そしてここにおいてすら、エリート中のエリートが存在する。同じことはヒトラー・ユーゲントにも労働戦線に

も官吏にもあてはまる。エリート原理は単に肉体労働者とホワイト・カラー労働者との区別を残存させるだけでなく、さらに進んでこれらの労働者階級の内部にも階層分化を生ぜしめる。これらの階層化は一つとして、分業に基づく社会の自然的結果ではない。それらは大衆指導権の掌握力の強化を意図する周到な政策の産物なのである」(三四五三四六頁)。

それでは被支配階級とは誰か。F・ノイマンはさまざまな被支配階級が存在を前提としたうえ、労働者階級の状態を分析し、ドイツ国民の全階層の中で、ただ労働者と俸給被雇用者だけが、労働と職業の自然的相違ないし共通性の上にうちたてられた組織をなにとつまたない。たとえば医者や弁護士のためには特殊な組織があり、企業者のためには手工業組合、諸集団、商工会議所、手工業会議所がある。しかし労働者の属する労働戦線は、労働者の利害のための組織でもなく、労働者だけの組織でもない(三五七、三五八頁)。つまり労働者階級は階層化された社会において下位におかれている。

F・ノイマンにおいてすでに、支配体制を多頭制的に捉えていることがうかがわれる。第三帝国における民衆の配置という我々の問題関心からすれば、大衆の階層化および労働者の地位が明確にされている点がとくに重要である。つきにこれらの全体主義的ナチ体制論に批判的な立場から書かれた研究を取り上げたい。

三

近代化論の立場にあるD・シェーンボウムの『ヒトラーの社会革命』

を検討しよう^⑤。彼によれば、ナチスは領土を拡大し、そこに農業的社会を建設することを目ざした。それは大企業、大都市、大労働組合の専制支配の修正、同時にヴェルサイユ体制の修正を意味した。しかしヴェルサイユ体制の修正をせまるためには、強大な軍事力の存在が前提であった。その結果、ナチは大企業、軍、官僚、また労働者階級とも和解せざるを得ず、経済の急速な復興とその高度化をなしとげ、軍備を増強し、膨脹政策を押しすすめたため、結局、その反近代イデオロギーとは逆に、工業化、都市化の進行をかえって促進する結果になった。これをシェーンボウムは目的と手段の二重革命、ヒトラーの社会革命と名付けている。

ナチスが与えた影響を、社会の構成諸集団について個々に分析しているが、彼の見解が顕著にあらわれている労働者および企業家について紹介したい。第三帝国において労働者は、自らを組織する権利を失ったが、この権利喪失は強制的同質化の一環であり、労働者のみならず、他のさまざまな集団も同様の運命にあった。経済的には労働者は職を得て再び暮しが立つようになったのであり、幾百万の労働者にとつては、ヒトラー以前の時代と第三帝国との違いは権利を失ったという問題よりも、再び職を得たということである。また業績次第では上昇の可能性もあたえられた。自由の喪失は精神的平等の促進と組み合わせられ、市民的レクレーションへの労働者の参加、労使合同の大旅行等によって身分差がおおわれた。個々の実業家についてみれば、第三帝国は所得配分になんら革命をもたらさず、大企業家が好調であったこと、中小企業よりもっと好調であったことは否定できない。しかし

企業としてみれば、労働組合が破壊され、「国民労働秩序法」が導入されるとともに、企業の受ける圧力の相手は労働組合から国家にかわった。シャハトの権力上昇とともに、大企業は中小企業に対する相対的勝利をかちとったが、シャハトの敗北とともに四ヶ年計画の圧力がかかってきた。四ヶ年計画は大企業の勝利ではなく、I・G・ファルベンの勝利であると。要するに第三帝国は、経営者の手から賃金、価格、労働条件、原料割当などの経営に関する決定権をほとんど全面的に奪った。企業、とくに大企業は協力の心構えの程度に直接比例して衰退したり繁栄したりした。

このように第三帝国はすべての階級を捲き込み、すべての階級に利益と不利益の双方をもたらしたのであるから、国家への忠誠も敵意もともに特定の階級と結びつくことがなくなり、ドイツはおそらく初めて、指導者たち、もしくは総統と指導される人々のある程度の同一化を達成したと(二八二頁)。シェンボウムはさらに、第三帝国では階級構造の革命であると同時に、ステイタスの革命であるような一つの革命がおこった、と言う。国民社会主義はドイツ工業社会のすでにかなりの程度に達していた社会的流動性を一層加速し、社会的上昇の機会に恵まれているという雰囲気を作り出し、その実例を提供した。実際、軍、経済界、官僚においてさえ上昇の可能性はあった(三〇九頁)。

他方、これに伴って起こったステイタスの革命は、エリート主義とは無関係で、むしろ平等主義の勝利、ヒトラーを権力につけた民衆運動への報酬およびその完成であった。つまり学位も家名も自立できる

経済的地位ももたない人間が起工式で礎石を置いたり、駅頭で外国の賓客を迎えたり、劇場の貴賓席を要求したりするということは、それを楽しんだ人々にとっては真の社会的上昇であった(三〇九頁)。役職、勲章、制服という形で権限とはかわりなく、壮大な規模でステイタスの配分が行われ、幾万もの人々がヒトラーの提供したすばらしい新世界にみずからを同化したのである。この新世界は、たとえばエリートを創らなかつたにせよ、第三帝国は開放的社会であるという一般的イメージの定着に大きく貢献したと(三一〇頁)。

S・ノイマンのナチズム論が産業革命以降急激に増大した都市と伝統的秩序の存続する農村を前提としていたのに対し、シェンボウムは工業社会を立論の基礎にしている。そして工業社会において工業の破壊を目指すのがナチズムであると規定している。筆者も、ナチズムが反工業的、農本主義的傾向を持っていたと考える。しかしこの傾向が大衆になんらかの共鳴板を見出したとすれば、それは伝統的秩序が崩壊しつつもなお存在していたためと考える。⑥したがってシェンボウムのように、一九三〇年代のドイツを工業社会と割り切ってしまうことには問題があるように思われる。さらにF・ノイマンが階層化とエリート主義が第三帝国の社会の特質としたのに対し、シェンボウムはこの見方では第三帝国のもつダイナミズムが説明できないと批判する。彼は機能面から第三帝国を指導者たちと指導される人々に分け、後者について、企業家も中間層も労働者も農民もいづれも平等化されつつある社会と捉え、この平等化傾向がダイナミズムを生み出すと言う。先述したように企業家も労働者も損失を受けたことでは同じと言

うが、その損失の味はまったく異なっており、両者を同列におくことはできない。社会の平準化を促すものとして、シェーンボウムはとりわけステイタス革命を重視する。この考えは第三帝国の特徴の一つを表わすものとして捨てがたい見解である。しかしこれを彼の言うほど過大評価することはできない。むしろ彼の挙げる名誉職や勲章の授与等は、S・ノイマンが独裁下の人民投票について、それは人民の意志と決断を表わす行動ではなく、人民の「指導者との一体化」を表わす儀式であると述べているが、これと同じ機能をはたすのではないであらうか。つまり第三帝国に積極的にコミットさせるための手段。

四

マルクス主義的立場からのナチズム論として、R・キューンルの『自由主義とファシズム—ブルジョア支配の諸形態』を検討したい^⑦。彼によれば、ナチ体制はナチ運動と伝統的支配階級との同盟にもとづいて成立した。その社会的機能は資本主義経済の危機、ひいては資本主義的秩序の動揺下でこうした体制に反逆しようとする大衆に対し、既存の秩序を維持するために大衆の基盤を提供することであり、対外的には軍事的膨脹政策を容易にすることであった（一九〇、一九一頁）。

ナチ党と伝統的支配層との同盟は、社会主義的な労働運動の弾圧、民主主義の解体、独裁的政府の樹立、国家の権力範囲の拡大等、国家と社会の秩序にかんする基本的問題で一致していたことによって保たれた。彼によれば、ナチ党は大資本のたんなる執行機関ではなく、大衆組織のなかに独自の権力基盤をもっていた。しかしナチ党が執行権

力を掌握したといっても、執行機関全体がナチ党の機関になったのではなく、行政機構や司法や軍部は全体として旧態のまま、ナチ政權に引き継がれたのであり、伝統的支配層すなわち大企業、軍部、大土地所有、官僚、教会はそうした機関を通じて自己主張できた（一九二、一九七、二〇九頁）。

キューンルによれば、ブルジョア支配のあらゆる形態は資本主義的な社会秩序、財産秩序およびそれと結びついた上層階級の社会的特権を維持する機能をもっている。この点では議会制法治国家の民主主義とファシズムとのあいだにはなんの相違もない。相違は、支配の方法のうちにある。彼によれば、ファシズム体制の支配手段は全面的永続的テロと非合理主義、独占的宣伝と攻撃欲を発散させる自由、社会全体の組織化であった。最後の点について説明をつけ加えるならば、ファシズムはあらゆる社会集団をできるだけ組織的に把握し、イデオロギー的に型にはめ、政治的に統制するために、社会全体に大衆組織の包括的な体系を浸透させようとする。大衆は、指導者原理によって編成された組織において、実際にはなんの影響力ももたない。しかしこの組織体系は下部の最小組織にいたるまで、非常に多くの役員を必要とするため、何十万という人々に役職をあたえ、自分が大きな全体にたいして責任を負っており、新しい帝国の建設には自分たちが不可欠であるという気持を抱かせたのである。こうしてナチ国家は理想主義と犠牲的精神を喚びさまし、大衆の大きなエネルギーを動員したと（二二七頁）。

キューンル理論の特徴は支配体制を、ナチ党指導部と伝統的エリ

トとのほぼ対等の立場での同盟とみるところにある。さらにナチ党指導部の自立性を支えるものとして大衆運動を重視する。ナチを支えた大衆とは、事務職員、手工業者、商店主、官吏、自由業者、小農等の、小市民的中産層であった（一一九頁）。これらの社会層は左翼の抑圧と民主主義の抹殺を歓迎し、テロのうねりに自発的に参加した。しかしこれらが達成されると、彼らはみずからもっと安定した社会的地位を獲得するために、上層階級と闘おうとした（一二二頁）。その結果、ナチ大衆のなかで、伝統的支配層の利害と対立した小市民的、反独占的グループはナチ独裁の権力体制から排除されたのであった（一九六頁）。ナチ大衆がすべて第三帝国において経済的社会的利益にあずかったわけではないという見方は、農民層のみが恩賞にあずかったとするS・ノイマンの見解にもつながり、大事な点だと思う。後に触れたい。キューンルは、大衆が社会的経済的上昇の道を断たれたにもかかわらず、ナチ体制に味方したとみている（一九六頁）。はたしてナチ支配体制はキューンルの言うようなテロと宣伝、組織化による動員という方法のみで大衆の支持を獲得しえたのであろうか。あるいは大衆はあきらめ、忍従したのだろうか。キューンルは下部構造についてはほとんど分析していない。支配の手段を考える際には、S・ノイマンの指摘、すなわちデモクラシーの経験を忘れぬ民衆を統治するため擬似民主的装置を必要とするという見方が示唆を与えてくれるように思う^⑧。

さてこれまでの考察から、ナチ支配体制にかんし幾つかの見解のあることが明らかになった。しかし第三帝国における民衆の配置状況と

いう我々の本来のテーマについては、なお不十分である。ともかく、統治された人々はさまざまな位置におかれており、一まとめにできないことが明らかとなった。大衆一般ではなく、ひとまず各社会層に分けて分析することの方が生産的であると思われる。さらに統治された各社会層のうち労働者階級については、労働者として権利を奪われ、抑圧の対象とされたこと、捉えられる。

新旧中間層は一九三三年まではナチ運動の社会的基盤であったが、三三年以降もそうであったのであろうか。ヴィンクラーは一九七七年の論文において、旧中間層なによりも手工業者層について「不要の社会層」と述べている。すなわち彼は、ナチ党が権力掌握後も動員可能な中間層的基盤をよりどころとしたという見解に疑問を呈し、営業的中間層はすでに一九三六年以来政治的守勢に追いやられ、社会的に孤立したと^⑨。これに対しフォン・ザルデルンはファシズムの社会的機能が危機に瀕した資本主義経済の再建であるかぎり、それは旧中間層の利害とも一致しており、ファシズムと旧中間層の間には利益共同体が成立した。その利益共同体の核は、プロレタリア的存在やユダヤ人やアウトサイダーを犠牲にして（例えば闇労働や行商の制限、店舗の統合や閉鎖など）、旧中間層のなかで既定の地位にある部分を健全化することであった。第三帝国の中間層政策について言えば、戦争経済がすすめられるにつれ、中間層政策に資金が投じられることはますます少なくなっていくが、その代りなら大規模な費用を要しない措置、例えば強制インマング制や親方試験の導入がおこなわれた。フォン・ザルデルンによれば、手工業者が全体として不要の社会層に堕ちたの

ではなく、それは両極化した。すなわち軍事経済の進むなかで、この経済への潜在的ないし現実の適性をもっているかどうかによって、両極化し、一部は上昇して国家に不可欠の層となり、他の部分は没落した。このような旧中間層の整理過程で生き残り、経済力を増したグループが職業身分組織を支配し、ファシズム体制の社会的基盤となったことを、フォン・ザルデルンは強調する。^⑩

彼女は、F・ノイマンのエリート主義と階層化という考えを、旧中間層に適用した。私もこの方法を支持したい。附言すれば、農民、手工業者、小売商、それぞれの社会層内部での階層化のみならず、経済的社会的にみて、これらの社会層の相互関係も階層化され、農民を上位に、手工業者、小売商とつづき、小売商が一番不利な立場に置かれていた。

ナチ体制の被支配層について、農民層を最上位とする階層化された社会とみる考えは、なお作業仮設の域を出ない。今後、史実によって確かめ、あるいは修正していかなければならない。その上で、この社会とナチ支配体制を整合的に捉えたい。

注

① この論争についてはさしあたり、以下を参照。佐藤健生「ナチズムーヒトラー主義ードイツ・ファシズム」『紀尾井史学』第二号、一九八二年、H・モムゼン「ナチ支配体制の内部構造」『思想』第七一三号、一九八三年。

② Peter Hüttenberger, Nationalsozialistische Polykratie, in: Geschichte und Gesellschaft, 2. Jahrgang, 1976.

③ ここで筆者の個人的体験を記すことをお許しいただきたい。筆者は一九八一年八月から一九八二年十月まで西独の北西部に位置するヴェストファーレン州のビーレフェルトに滞在した。その間、ラジオやテレビを利用したが、第三帝国の出来事を痛恨事として受けとめる番組が毎日のように、どこかのチャンネルで繰りかえし流されており、ナチスの悲劇を逃れることのできない問題として受けとめようとする姿勢が公的に存在していることを切実に感じた。個人的には、ナチ時代の事には触れたくないというのが実情のようであった。御両親はナチ時代について話されますか、と幾人かの学生に問うと、いづれも否という答えであった。ミュンスタールという、古いカトリックの町で知り合った商店主は、私が食糧身分団の史料を集めていると言うと、食糧身分団という言葉を聞くのは一九四五年以来はじめてだ、と驚いていた。彼の父親はミュンスタール郊外で農場を経営していたので、ナチ時代には食糧身分団に属していたが、一九四五年以後一度もそれについて口にしなかったと。第三帝国での生活については、僅かの人々から話を聞いたに過ぎない。印象に残った幾つかを記しておきたい。(一)現在リトアニア領に属するかつての東プロイセンのヨハニスベルク郡で中農として四〇ヘクタール近くの農場を経営し、戦後西独に引揚げ、ビーレフェルトで建築労働者として働き、現在年金で不自由なく暮らしている六十才過ぎの男性。ナチ時代には農産物価格が固定されていたので、収入が安定していたよかった。(二)ビーレフェルト近郊に一四世紀以来安定している大農一家。現在の当主は四十才過ぎで、一人の農

業労働者とともに、百ヘクタールの農地を耕作し、一千頭の豚を飼育。農場は機械化され、「農業工場」(Agrarfabrik)という表現がびったりであり、当主は堂々とした体躯と立派な風貌の持主であり、かつてR・W・ダレーが理想化したヴェストファーレンの農民貴族を彷彿させる人物であったが、彼もナチ時代を肯定的に評価していた。また、当時は機械化が奨励されていたが、この農場には機械はなく、収穫は鎌でおこない、農業労働者を十人以上雇っていた。食糧増産が宣伝されたが、とにかく農産物の量が問題とされ、その質は全然問われなかった。(三)ミュンスターの農業会議所の資料室室長で、四十代後半の婦人。娘の学校生活と比較して、彼女の経験したナチ時代の学校では体育教育が重視されていたので、身体の鍛練の面で良かった。(四)ベルリンのあるレストランで給仕をしている二十代の青年。彼の父親は親衛隊員であったが、父親はそうすることが正しいと思って、親衛隊員として働いたのであり、彼は父親を尊敬していると。(五)南ドイツのフライブルクのホテルで出合ったイスラエルからの老女。一九二〇年代フライブルクに住んでいたが、オーストリアを経由してイスラエルに亡命。ナチ時代のこととは思いついたくもないいやな怖ろしい経験と。

- ④ シグマンド・ノイマン著、岩永・岡・高木訳『大衆国家と独裁—恒久の革命—』みすず書房、一九六〇年(原著は一九四二年出版)。
 フランツ・ノイマン著、岡本・小野・加藤訳『ビヒモス—ナチズムの構造と実際—』みすず書房、一九六三年(原著は一九四二年出版)。

- ⑤ D・シェーンボウム著、大島通義、大島かおり訳『ヒトラーの社

会革命』而立書房、一九七八年(原著は一九六六年出版)。

- ⑥ 例えば、東ドイツとの国境に近いヘッセン州のある村の第三帝国時代にかんする論文によれば、この村では一九二〇年代末の経済恐慌によって村落社会の分化傾向が強められ、戦時下の闇経済を通して村の社会的ヒエラルヒーは現実に崩壊した(K. Wagner u. G. Wilke, Dorfleben im Dritten Reich: Körle in Hessen, in: Die Reinen fast geschlossen, Beiträge zur Geschichte des Alltags unterm Nationalsozialismus, herg. v. D. Peukert u. J. Reulecke, 1981, S. 89 u. 102)

- ⑦ R・キューンル著、伊集院立訳『自由主義とファシズム—ブルジョア支配の諸形態』大月書店、一九七七年(原著は一九七一年出版)。キューンルの見解をファシズム論史に位置づけたものとして、山口定『現代ファシズム論の諸潮流』有斐閣、昭和五十一年、二二一—二五〇頁を参照。

- ⑧ たとえば、ヒトラーは「人民の名において」という表現を付して命令を下した。

- ⑨ H. A. Winkler, Der entbehrliche Stand, Zur Mittelstandspolitik im "Dritten Reich", in: Archiv für Sozialgeschichte, 17. Band, 1977, S. 40.

- ⑩ Adelheid von Saldern, Mittelstand im "Dritten Reich", Handwerker—Einzelhändler—Bauern, 1979, S. 234ff.